

会社の概要

会社名 東洋合成工業株式会社
 本社 東京都台東区浅草橋1丁目22番16号
 ヒューリック浅草橋ビル8階
 設立 1954(昭和29)年9月27日
 資本金 1,618百万円
 従業員数 825名(2022年9月30日現在)
 事業内容 ・ディスプレイ(液晶並びに有機EL)用、並びに半
 導体用として各露光波長に対応した(紫外線、
 KrF、ArF、EUV各世代)感光材、ポリマー製品
 ・半導体・電子材料向け高純度合成溶剤、香料向
 け化学品、液体化学品の保管管理・物流倉庫業
 ホームページ <https://www.toyogosei.co.jp/>

役員

代表取締役社長 木村 有仁 常勤監査役 森 寧
 常務取締役 出来 彰 監査役 宮崎 誠**
 取締役 平澤 聡美 越山 滋雄**
 渡瀬 夏生
 鳥井 宗朝* *社外取締役
 松尾 時雄* **社外監査役

株式の状況

発行可能株式総数 30,000,000株
 発行済株式総数 8,143,390株
 株主数 5,901名

株主メモ

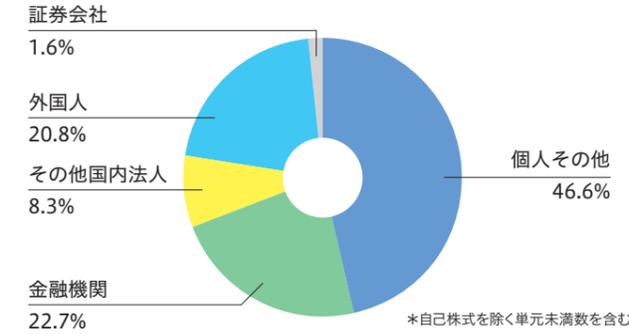
事業年度 4月1日から翌年3月31日
 定時株主総会 毎年6月下旬
 剰余金の配当の基準日 3月31日 中間配当を実施するときは9月30日
 定時株主総会基準日 毎年3月31日 ※その他必要がある場合は、予め公告いたします。
 単元株式数 100株
 公告方法 電子公告により行います。
 公告掲載URL <https://www.toyogosei.co.jp/ir/koukoku.html>
 ただし、電子公告によることができない事故その他のやむを得ない事由が生じたときは、日本経済新聞に掲載する方法により行います。
 株主名簿管理人 東京都千代田区丸の内一丁目3番3号 みずほ信託銀行株式会社
 同事務取扱場所 みずほ信託銀行株式会社 本店証券代行部
 株式の諸手続き 口座を開設されている証券会社までお問い合わせください。
 特別口座をご利用の株主様は、みずほ信託銀行株式会社0120-288-324(フリーダイヤル)までお問い合わせください。

東洋合成工業株式会社

〒111-0053 東京都台東区浅草橋1丁目22番16号
 ヒューリック浅草橋ビル8階
 TEL 03-5822-6170
 E-mail ir@toyogosei.co.jp



株式の分布状況



大株主

株主名	持株数(千株)	持株比率(%)
木村 有仁	1,094	13.8
SSBTC CLIENT OMNIBUS ACCOUNT	617	7.8
木村 愛理	583	7.4
日本マスタートラスト信託銀行株式会社(信託口)	414	5.2
株式会社千葉銀行	298	3.8
株式会社さくらばし銀行	298	3.8
あいおいニッセイ同和損害保険株式会社	248	3.1
STATE STREET BANK AND TRUST COMPANY FOR STATE STREET BANK INTERNATIONAL GMBH, LUXEMBOURG	242	3.1
BRANCH ON BEHALF OF ITS CLIENTS: CLIENT OMNI OM25		
株式会社日本カストディ銀行(信託口)	229	2.9
木村 正子	205	2.6

当社は、自己株式を206千株保有しておりますが、上記大株主からは除外しております。また、持株比率は自己株式(206千株)を除外して計算しております。

東洋合成

第73期 第2四半期報告書

2022年4月1日 ▶ 2022年9月30日



証券コード: 4970

業績ハイライト

決算概要

当第2四半期の電子材料業界は、感染症の拡大に端を発した世界的なロジスティクス混乱も正常化へ向かい、半導体不足は汎用半導体を中心に緩和され、一部では在庫調整局面に入りました。一方、先端半導体領域では、米中対立が続いたものの、DX加速や投資競争によって需要が拡大しました。

当社では先端半導体の旺盛な需要に対し、増産や原燃料・運賃高騰分の価格反映に努め、売上高は前年同期比11.7%増の17,553百万円となりました。利益面につきましては、原燃料・運賃の高騰、技術開発や生産能力増強などの費用増があったものの、高付加価値品の増販と生産性向上に努め、営業利益は同20.4%増の2,852百万円、経常利益は円安による為替差益もあり同38.9%増の3,278百万円、四半期純利益は同38.3%増の2,247百万円となりました。

	2022年9月30日	前年同期比
売上高	17,553百万円	+11.7%
営業利益	2,852百万円	+20.4%
経常利益	3,278百万円	+38.9%
四半期純利益	2,247百万円	+38.3%

当第2四半期のポイント

- POINT 1 フラットパネルディスプレイの需要減速の中、先端半導体材料の需要拡大と円安進行により増収・増益
- POINT 2 感光性材料セグメントは、フラットパネルディスプレイの需要が減速しディスプレイ用途の売上は減少したものの、ロジック半導体を中心とした先端半導体向け材料の増産により、技術開発や生産能力増強の費用増を吸収し、増収・増益
- POINT 3 化成品セグメントは、半導体向け高純度溶剤が増加、原燃料・運賃高騰に伴う価格反映を実施。香料材料は、景気減速の影響により需要は軟調となり、ロジスティックは、自動車の減産などから溶剤の荷動きは減少しているものの、タンク契約率は高水準を維持し、化成品セグメントでは増収・増益

業績概要





代表取締役社長

木村 有仁

変動が激しい事業環境へ対応し、ハイテク材料の開発供給で社会の発展に貢献してまいります。

当第2四半期の決算概要

世界経済は、コロナ禍からの景気回復が進む中、中国でのロックダウンによるサプライチェーンの混乱、ウクライナ侵攻の長期化などにより世界的なインフレが加速し、資源価格が上昇しました。その後、資源価格も高止まり、インフレ抑制のため世界的に政策金利が引き上げられ、景気後退への懸念が高まっています。一方国内経済は、コロナ対策が緩和され経済活動正常化が進み、景気に持ち直しの動きがみられましたが、歴史的な円安加速による輸入物資価格の高騰など先行き不透明な状況が続いております。

また電子材料業界では、先端半導体の需要は好調な一方、コロナ特需の一巡により、PC・TVやスマートフォンなどの需要は減少しました。

このような状況下、当社は先端半導体の増産を加速し、お客様や原材料調達先の協力のもと原燃料・運賃高騰分の販売価格反映にも努め、売上高は17,553百万円(前年同期比+1,843百万円、+11.7%)となりました。利益面では、技術開発や生産能力増強などの費用を高付加価値品の販売増加などにより吸収し、営業利益は過去最高となる2,852百万円(同+483百万円、+20.4%)、経常利益は為替差益も寄与し、3,278百万円(同+918百万円、+38.9%)、四半期純利益は2,247百万円(同+622百万円、+38.3%)となりました。

セグメント別概況

感光性材料セグメントは、先端半導体用途の強い需要が継続した一方、ディスプレイ向け感光材は調整局面となりました。全体としては先端品の強い需要により売上は増加し、営業利益も過去最高益となりました。今後も需要拡大と技術進化に対応するため、新材料の研究開発、製造技術開発、生産性の向上、生産能力増強を着実に進め、高品質製品の安定供給に努めてまいります。

化成品セグメントの電子材料向け溶剤は、コロナ特需の反動による民生品の販売減少の影響を受けたものの、半導体領域は強い

需要が続きました。また香料材料は景気減速の影響により売上が減少し、ロジスティック関連は自動車の減産などから荷動きは減少しましたが、タンク契約率は高水準を維持しました。全体では半導体向け溶剤の牽引と、原燃料高騰に伴う価格反映の実施により売上高は増加し、感光材同様に営業利益は過去最高益を達成しました。

今期の見通しについて

半導体業界全体としては、汎用半導体を中心に減速感はあるものの、先端半導体は強い需要が続くと見込んでおります。またディスプレイは年内在庫調整が続き、年明け以降緩やかな回復に向かうと考えております。

上記のような事業環境を踏まえ、売上高を修正前40,000百万円から35,000百万円(△12.5%)へ修正させていただきました。先端半導体の強い需要は下期も継続するため、通期利益は期初予想から変更ございません。下期は上期同等の売上を計画しておりますが、当社では中期経営計画「Beyond500」の達成に向け、生産能力増強を継続するため、下期は固定費増の見通しであり、営業利益は下期単体では減少の計画となっております。当社の中長期の需要を見据えた戦略に、皆さまのご理解賜りますようお願い申し上げます。

株主還元について

株主の皆さまへの還元につきましては、安定配当の維持を基本としつつ、業績、配当性向、財務バランスなどを総合的に勘案して決定しております。この方針のもと、年間配当40円を計画しており、当期の中間配当は期初計画通り1株当たり20円の配当とさせていただきます。今後も事業成長投資と財務健全性とのバランスも勘案しつつ、事業の拡大とともに株主の皆さまへの還元を図ってまいります。

株主の皆様におかれましては、何卒、当社の持続的な事業成長にご理解賜り、引き続き変わらぬご支援賜りますようお願い申し上げます。

TOPIC

淡路工場に新蒸留塔を増設

当社淡路工場において、半導体向け溶剤を生産する連続式蒸留塔を1塔増設しました。淡路工場では、半導体製造に使用されるシリコンウエハーの洗浄液などに使う溶剤を約10品目生産し、国内外の半導体メーカーなどに供給しています。半導体の需要拡大に対応するため、新蒸留塔やタンクの増設、設備改善などの能力増強施策を実施し、2021年度年比で約2倍の生産能力拡大を見込んでおります。また、当社はサステナビリティの観点からニーズが高まっている溶剤リサイクルにも取り組んでおります。今回導入した蒸留塔により、更なる生産性向上と品質向上を図ってまいります。

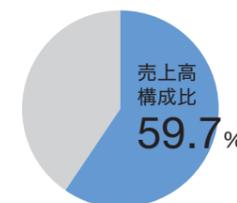
【淡路工場の概要】

所在地：兵庫県淡路市生穂新島9番1号
竣工日：2013年4月8日
主な特色：
・純度の高い溶剤を供給
・環境に配慮し、地域と共存する工場
(太陽光発電パネルの設置、LNGボイラーの導入、グリーン電力の購入など)
今回の投資額：蒸留塔および関連設備で約10億円



セグメント情報

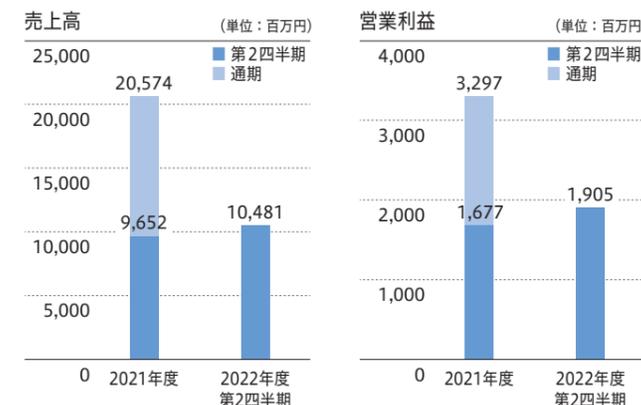
感光性材料セグメント



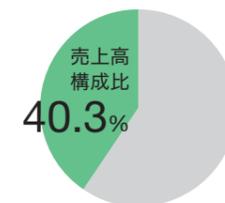
業績の概況

当第2四半期は、フラットパネルディスプレイの需要が減退しディスプレイ用途の売上は減少したものの、先端半導体向け材料はロジック半導体を中心に強い需要が続く、加えて急激な円安進行もあり売上は増加しました。

この結果、同セグメントの売上高は10,481百万円(前年同期比+828百万円、+8.6%)と伸長しました。また、技術開発や生産能力増強などの費用増を先端半導体向け材料の増産により吸収し、営業利益は1,905百万円(同+228百万円、+13.6%)となりました。



化成品セグメント



業績の概況

電子材料向け高純度溶剤は、コロナ特需の反動によるスマートフォンやPCの販売減少に加え、経済の先行き不透明感から来る消費低迷により需要は軟調となりましたが、先端半導体領域の強い需要と拡販、原燃料高騰の価格反映が進み、売上は増加しました。香料材料は、景気減速の影響により需要が軟化したことで売上は前年同期を下回りました。ロジスティックは、自動車の減産などから、溶剤荷動きは減少したものの、タンク契約率は高水準を維持しました。

この結果、同セグメントの売上高は7,072百万円(前年同期比+1,014百万円、+16.7%)、営業利益は946百万円(同+254百万円、+36.9%)となりました。

